

B-2 西部ジャワ

105. パスンダンの地



インドの文献によれば4世紀頃、ジャワ島にヤーヴァドヴィーバ(Yavadvipa)国の存在が記されている。ヤーヴァはサンスクリット語の「大麦¹」という意味でジャワの語源である。

る。しかしヤーヴァドヴィーバ国の存在を裏付ける遺跡はまだ発見されていない

ジャワ島で存在が明らかな最古のものは5世紀のタルマ王国(→260)である。遺物の一つはボゴールのプルナワルマン王の碑文の出土である。石に刻まれた絵のような文字は南インドのパッラワ文字である。もう一つはトゥグー(→166)で発掘された石碑である。

インドに近い西部ジャワは中部ジャワより早くから拓けていたが、その後のジャワ島の歴史は中部ジャワ・東部ジャワを中心に展開した。西部ジャワにもパジャジャラン王国(→260)というスンダ人の王権があったが、地方王権の枠を超えることができずジャワ王権に対して従属的な地位に甘んじた。いわば日本の九州と近畿の関係にも似ている。

西部ジャワといわれるジャワ島の西部はスンダ人の住む地という意味で「パスンダン(Pasundan)」といわれる。ちなみにパスンダン国という国がインドネシア独立戦争の際にオランダの傀儡国^{カいらい}として名乗ったことがある。

人口2千万人のスンダ人はジャワ人に次ぐインドネシア第二の民族集団である。両者ともジャワ島の民族であり、ジャワ人が中部から東部に、スンダ人は西部とすみわけている。

西部ジャワ州を人文地理的に区分すれば、①西部のバンテン地区、②北部海岸低地部のパシシル地区、③南部高原のプリアンガン地区の3区分になる。

首都ジャカルタの所在地は西部ジャワ州の②にある。ジャカルタの地はバンテン王国(→261)から取り上げてオランダの拠点として発展したものである。いわばパスンダンの中の租界であり、スンダ人は関与していない。今日の行政区分でも首都ジャカルタは特別州として西部ジャワ州とは別である。

¹ <編者註>「粟」である。

タンゲラン、ボゴール、ブカシは行政組織上は西部ジャワ州に属するが、実質はジャカルタの衛星都市で大ジャカルタ圏という意味でジャボタベック(→169)といわれる。ジャカルタの自己増殖は衰えることなく続いており、ジャカルタ周辺はもはやパスンダンとは言い難い。

①のバンテン地区はジャワ海に面して交易で栄え、バンテン王国が栄えた。しかしバンテン王国の創立者も他所から来たイスラム教徒でスンダ人ではない。バンテン地区には他からの移住民が多くスンダ固有の文化の色彩は薄い。最近バンテン州として西部ジャワ州から分離独立した。²

狭い意味のスンダとはジャワ島西部内陸部のことで、バンドゥンを中心に広がる高原地帯のプリアンガンのことであろう。

106. プリアンガン地方

ジャワ島の気候は西のスマトラ島寄りほど熱帯雨林気候であり、人の居住は高地の方が快適である。ジャカルタからプンチャック峠を超えた先の火山に囲まれた風光明媚な高原地域が「プリアンガン (Priangan)」³である。

もともと西部ジャワはスンダ人の土地であり、ジャカルタの前身であるスンダ・クラパもバンテンもパジャジャラン王国(→260)の外港であったが、港の開放性のためジャワ人やその他のイスラム教徒が港を拠点に海岸沿いに増殖した。もともと人口少ない海岸地帯にはスンダ文化より外来文化の影響が顕著であった。

これに対して内陸部のプリアンガンはスンダ人の故郷であり、スカブミ (Sukabumi)、スメダン (Sumedang)、チアンジュル (Cianjur) という高原都市がスンダ文化の中心地であり言葉も美しい。バンドゥンを中心としたプリアンガン地方は北の海岸地方やバンテン地方を見下し、プリアンガンの言葉や慣習は上品であると思っている。

プリアンガンは地理概念でなく、スンダ文化が保たれている文化概念かもしれない。プリアンガンは言葉だけでなく女性も美しい。俗に“スンダ美人”と言われる“Mojang Priangan”の産地はプリアンガンである。スンダ美人は目が大きくて丸い。インドネシア有数のノナ・チャンティック (nona cantik=美人)の産地である。ちなみにインドネシアの最も著名な美人の産地はマナド(→207)である。

4

オランダ植民地時代に西部・中央・東部プリアンガン県があり、バンドゥンが中心であり、現在もプリアンガンの都である。近年はバンドゥンへも外来文化の進出が激しい。バンドゥン工科大学 (ITB) はインドネシアの最高学府でインドネシア全土からの学生が集まり、スンダ色は薄れていく。バンドゥンのインドネシア化の進行によって文化概念としてのプリアンガンはさらに奥のスメダン、ガルット、タシクマラヤ、チアミスまで引っ込んだともいえる。

オランダのジャワ島進出はジャカルタを拠点としてプリアンガンを領有したことから、そこで強

² <編者註>2000年にバンテン州として分離した。

³ プリアンガンの語源は「精霊の地」である。

⁴ <編者註>編者もこのように聞いていたが、現地に行くとそれほどでもないことが分かった。インドネシア人の美人・美男子の定義は「肌が白い」であり、美形であるということではなかった。バンドゥンに美人が多いのは大学が多いために各地から上流社会の子女が集まるためである。

制裁培制度(→282)が始められた。プリアンガンでのコーヒー(→559)の栽培に成功したので“プリアンガン方式”としてオランダの支配地域に波及させた。この場合のプリアンガンとは悪名高い強制栽培制度のことである。

オランダ植民地政庁は首都バタビアの都市機能をバンドゥンに分散した。バンドゥンは軍事都市として植民地時代には蘭印軍の本拠地であった。冷房のない時代であるから軍隊は涼しい所で平時は英気を養い、有事の際に下界へかけ降りるという思想であろう。

今日ではインドネシア最強といわれるシリワンギ師団の所在地であり、兵器工場も有する国営航空機会社(→533)もバンドゥンに所在している。

ジャカルタは《前面の海辺》にある。バンドゥンは《背後の山》にある。後者が前者を見張っているような関係に見えなくもない。

107. バンドゥン市

高原の町といわれる「バンドゥン (Bandung) 市」はタンクバン・プラウ山の 750m の山麓に位置しており、気候は平地より爽やかで過ごしやすい。山の標高は 2076m であるがバンドゥン自体が高地であるのでそのような高さには見えない。

バンドゥンに人の住み始めたのは比較的新しく 17 世紀中頃以降に開発された町である。バンドゥン⁵のある場所は太古は湖であったが、タンクバン・プラウ山の溶岩の流れで埋め尽くされて干上がり、チタルム川(→540)によって排水されている。湖の決壊はサンクリアン伝説(→109)として伝えられている。

豊かな農地を後背地として、1864 年プリアンガン州の中核都市となり、さらに 1909 年ジャカルタとの間に鉄道が敷かれ交通の便がよくなり、蘭印軍の基地となった。

オランダ植民地時代の首都機能をバタビアから遷すべく、段階的に中央統治機構の一部はバンドゥンに移された。このシステムはそのまま共和国に引き継がれ、今でも郵政、通信、運輸の中央官庁は首都ジャカルタではなくバンドゥンにある。

植民地時代のオランダ人の官吏や軍人は停年を迎えてもヨーロッパに戻らずに気候がよくて住みやすいバンドゥンで優雅に年金生活の余生を過ごす人が多かった。かつてのバンドゥンは“花の都”とか“ジャワのパリ”といわれる小奇麗な町であり、植民地時代には西欧人のバンドゥン居住者の数はバタビアを上回っていた。

バンドゥンは戦略上の要地であることから独立戦争の際にもインドネシア共和国側とオランダ側の間で争奪の攻防に巻き込まれて破壊された。

その中でもバンドゥン火の海事件(→322)といい自ら火をつけて燃え盛るバンドゥンを立ち去らねばならなかった共和国の兵士が、再来を期してバンドゥンに別れ告げる『ハロー・ハロー・バンドゥン』(→826)はインドネシア人の誰もが知っている国民歌である。

バンドゥンを追われた兵士は本拠地のないままジャワ島の各地を転戦し、独立戦争終了後ようや

⁵ バンドゥンの語源は「堤防」という意味である。

く故郷のバンドゥンに戻った。その不屈の精神はインドネシア最強のシリワンギ師団の伝統となった。

1955年、アジア・アフリカ会議(→458)の開催地としてバンドゥンの名は世界に知られた。その名残はバンドゥンの東西のメインストリートは会議を記念して「アジア・アフリカ通」と命名され、その会場となった「グドゥン・ムルデカ (Gedung Merdeka=独立堂)」は今では会議場をかねた博物館となっている。しかし由緒ある建物は外見も内装もかなり痛んでおり、一世を風靡したアジア・アフリカ新興勢力の植民地解放運動の盛り上がりの“風化”を象徴している。

バンドゥンの市街地はタンクバン・プラウ山の南山麓に広がっている。歩くと坂の多い町であることが分かる。北が山の手でバンドゥン工科大学も北側にある。南が下町である。町の重心は少しずつ北へ移動している。

108. バンドゥン工科大学

今のバンドゥンは活気にあふれる若者の町である。短大を含み27もの大学がある。その代表はITBとして知られる「バンドゥン工科大学 (Institut Teknologi Bandung)」である。山手に広がる広大なキャンパスの閑静なたたずまいはアカデミックな雰囲気である。

オランダ植民地時代、最高学府は本国のオランダであった。しかし現地に永住するオランダ人の子弟に教育を与える目的で1920年、工科大学が設立された。以来、バンドゥンは教育の町であったし現在もそうである。

続いて1924年にバタビアに法科大学、1927年に同じくバタビアに医科大学が設立された。学生はオランダ人が主体で華僑の子弟に若干の枠があり、原住民(インドネシア人のこと)には難関の門を突破した一部の優秀な子弟だけが入学を許された。

スカルノ大統領は1926年、ITB建築学科卒業の第一期生である。ITBは入学もさることながら卒業も難しく、スカルノも学生時代は熱心に勉強をしたようである。自伝では試験の時にはゴトンロヨン(→593)の世話になったと言っている。

ミナンカバウ風(→938)のデザインを取り入れた威風堂々の建物はオランダ領東インドを代表する大学であるといった意気込みであろう。

インドネシア独立後は全国に国立の総合大学が設立されたが、ITBは依然として理工系単科大学である。しかし、造形=芸術学部などもあり、実態は総合大学と同じである。学生数1万人を数える。ちなみに現在のインドネシアではITB、インドネシア大学(→746)、ガジャマダ大学(→120)がインドネシアの3大名門大学である。

スハルト政権時代はジャカルタで学生が騒いでも何かヤラセの臭いがした(現在は必ずしもそうとはいえない)。しかし伝統あるITBの学生が立ち上がるとその政治的意味ははるかに強かった。

パジャジャラン大学(UNPAD)は1957年に設立された国立総合大学である。11学部と1300余名の教官、13500余名の学生数を擁するが、各地に分校のある蛸の足大学である。早くから日本語教育に力を入れているため、日本からの助成金で日本文化センターを設け、日本文化の紹介に努めている。

研究機関で世界に名を知られている地質研究所は屋根が特大サテ(→766)に見えることで有名であ

る。付属の地質博物館にジャワ原人(→138)の標本があるが、展示してあるのはレプリカである。

プレートテクトニクス(→016)の理論によるインドネシア列島の複雑な地形と火山の解説がある。鉱物資源の展示などもあり、行けば賢くなる。

もともと繊維、皮革、食品加工がバンドゥンの地場産業であったが、学生が多いことからバンドゥンはインドネシアにおけるファッション発信基地にもなっている。通称“ジーンズ通⁶”には100軒を超えるジーパン店があり、わざわざジャカルタから車でカバン、ジーンズ、シャツの買い出しにやってくる。

109. タンクバン・プラフ山

バンドゥンは四方を火山に囲まれており、市街地の北方にあって最も親しまれているのは「タンクバン・プラウ (Tangkuban Perahu) 山」である。山の形は船をうつ伏せにした台形で、山頂が平たく四国の屋島のように見える。

その山容からタンクバン・プラウは「ひっくり返された船」という意味である。山の名の由来については次のような伝説が伝えられている。誤って父王を殺したサンクリアン (Sankuriang) 王子は追放される。幾星霜^{いくせいそう}をへて王子は青年となって戻ってきた。

ダヤン・スンビ (Dayang Sumbi) という美女と巡り合い恋に陥った。結婚を迫られた女性は青年の体の傷から実の息子であることに気がついた。母親は青年の求婚に根負けして、結婚を諦めさせる案として結婚式の前夜に「一晩でチタルム川(→540)をせき止めて湖を造り船を浮かべてその船上で結婚式を行う」という無理難題の条件を持ち出した。

王子はすぐさまダム建設に取り掛かった。本当にダムが出来上がりそうなを見て母親は慌ててブランテンの神力によって早めに全村の雄鳥に朝を告げさせた。絶望した王子は船を蹴っ飛ばした。ダムは壊れその溢れる洪水に溺れて二人とも死んだ。蹴っ飛ばして「ひっくり返された船」がいわゆる「タンクバン・プラウ」の名の由来である。

このタンクバン・プラフ山のサンクリアン伝説はかつてこの地に大地をひっくり返すような火山の大爆発によってチタルム川が堰とめられて湖ができたこと、ダムの崩壊による大洪水があったことを示唆するものである。ちなみにバンドゥンの地はかつては湖底であった。

タンクバン・プラフ山の過去における大爆発は山頂の直径7km、周囲16kmの火口からも窺える。12個の噴火口が数えられるらしいが、絶え間なく噴気をあげ続けて活動中は東端の火口のみで、今のタンクバン・プラフ山は穏やかな^{たなず}佇まいである。

バンドゥンから火口の縁まで車で30分で行けるので内外の観光客が押し寄せてきており、観光地のどこにもいる物売りはここでも健在である。

タンクバン・プラフ山の中腹にあるレンバン (Lembang) は標高1200mで高原避暑地である。空気の清明な所であるのでボスハ天文台がある。レンバン断層の眺めもすばらしい。マリバヤ (Maribaya) は滝と庭園が美しい。マリバヤに温泉もあるが、チアトル温泉(→896)の方が有名である。

⁶ ジーンズ通りの正式な名はチハンブラス(Cihampelas)通りである。坂が多かった。

タンクバン・プラウ山の麓に噴火口ができて地獄谷のように熱湯が噴出し、硫黄を含む蒸気を吹き上げている所がある。【ONSEN-TAMAGO】の看板があるのは観光の日本人がくるからである。

インドネシアの若い女性が噴気口の硫黄の煙を浴びている。東寺や四天王寺の縁日に年寄りが線香の煙を浴びているのと似た光景である。彼女等は硫黄の煙を浴びると肌が白くなると信じている。硫黄に脱色作用があるから科学的根拠はある。インドネシアに限らず東南アジアでは肌が白いことは美人の絶対条件である。

110. ガルト高原

バンドゥンから東にジョグジャへの街道は活火山や休火山の多くの火山がある。「ガルト (Garut) 高原」は風光明媚な火山性の山岳地帯でジャワ島のスイスといわれる。ジャカルタに近いボゴールやバンドゥンは距離の近い分だけ外来文化の影響を免れないが、ガルトから東の火山に囲まれた高原はスダの奥座敷でありスダ文化の香りが強い。

戦前にガルトに農園を拓き野菜や果実造りで成功した佐藤茂という日本人がいた。蜜柑^{みかん}の栽培に成功しジュルック・サトといわれる。1922年東本願寺派の総帥^{おおたにこうずい}大谷光瑞師が佐藤農園を訪れた。大谷はパパンダヤンが気に入りに別荘「環翠荘」をたて、8月になると日本の夏の暑さを避けるためジャワの別荘へ“避暑”に出かけたということだ。

パパンダヤン山 (Papandayan 2622m) は1772年の大爆発で標高が1200mも低くなった。犠牲者は3~4千人といわれる。その後も8回の噴火記録があり、4個の噴火口がある。火口原にはエーデルワイスに似たお花畑があるらしい。

チパナス (Cipanas) の直訳は「熱水」であるがごとく温泉リゾートである。近くにカモジャン地熱発電所(→203)がある。ジェット機のような轟音をたてて蒸気が噴出している。

ガルングン (Galunggung 2241m) 山の頂上は馬蹄形のカルデラである。1822年の爆発は百の村を破壊し死者4千人を出している。最近では1982~83年にも噴火し村を埋めている。多くの住民はスマトラ島へ強制移住させられたが、いずこからともなく再び人が住み着いている。豊かな土壌からの収穫への期待が危険をも省みなくさせている。

タシクマラヤ (Tasikmalaya) の平地に1万ものハンモック状の小さな丘が散在している。その生成の由来について学者が諸説を述べたが、4200年前のカルデラの崩壊の際の残留物という説が有力である。

レレス (Leles) 村にあるチャンクアン (Cangkuang) 寺院は9世紀頃の建造のヒンドゥー遺跡である。中部ジャワのボロブドゥール遺跡(→126)と比べると墳墓の規模にすぎないが、西ジャワでは唯一のヒンドゥー遺跡である。ディエン高原のヒンドゥー遺跡(→133)との類似性が指摘されている。チャンクアン湖に浮かぶ島にあるプロ・パンジャン (Pulo Panjang) 村はスダ文化の伝統を伝える。

バンドゥンからチルボンへ流れるチプレス川沿いのスメダン (Sumedang) は古王国の所在地であり、パジャジャラン王国(→260)の宝物が保存されている。

パガンダラン (Pangandaran) は海岸リゾート地である。インド洋に半島が突き出ており、付け根の所にリゾート・ホテルが建つ。河口から遠いので水がきれい、鮫がいない、海浜に珊瑚がないので

安全、大波が来ない、奇岩の美しい海岸がある、などでPRしている。

海ばかりでない。半島の先端が自然保護地域になっており、鍾乳洞もある。ジャングル・ツアー、キャニオン・ツアー、エコ・ツアーの観光メニューがある。バリ島を日本人に占領されたオーストラリア人にとって安くて新しい観光地になっている。

111. プラブハン・ラトゥ

ボゴールからグデ山とパンランゴ山の山塊を西側に迂回すると南山麓にスカブミ (Sukabumi) がある。1972年に大地震で町は破壊された。インドネシアで最も地震の多い町である。高度600mの火山の麓でそれなりに涼しいが、郊外高地のスラビンタナ (Selabintana) が本格的避暑リゾート地である。

太平洋戦争開始前にオランダ (蘭印政庁) に拘留されていた民族主義者ハッタ(→443)とシャフリル(→444)はバンダ島(→232)からスカブミに移された頃に日本軍がジャワ島を攻略し、二人は日本軍に迎えられてジャカルタに移った。

スカブミから南進するとインド洋の漁港「プラブハン・ラトゥ (Pelabuhan Ratu)」に出る。山が海に迫っており、山、岬、海、漁港は日本の伊豆半島を思い出す風景である。

ジャカルタ滞在の外国人は目の白っぽいジャワ海よりも、青々としたインド洋に憧れて直線距離140kmであるが悪路をものともせず4時間かけてやってくる。

村の魚市場へインド洋の魚を買うためにだけ訪れる人もいる。ジャカルタのパサール・イカン(→155)と異なった種類の魚があり、何よりも鮮度がよい。鱻^{ふかひれ}のセリ市に行き合わせることもある。



308号室の祭壇

プラブハン・ラトゥとは「女王の港」という意味である。女王とはインド洋を住処とするロロ・キドゥルという南海の女神である。プラブハン・ラトゥ近くのサムデラ・ビーチはスカルノ大統領当時に日本の戦時賠償資金(→362)で建設されたリゾート・ホテルがある。

このホテルでは308号室を特別室として常時、女王のために確保してある。ロロ・キドゥルが不意に訪れた際、もし満室であれば気分を害した彼女は何をしだすかわからないからである。この部屋へ特別許可を得て入室した人の話によると、部屋は真青の色に彩られ、荘厳で神秘的な雰囲気を漂わせているそうである。

ロロ・キドゥル伝説はスダの王女が王の薦める結婚を断ったため南海の海(インド洋のこと)に追放されるというのが通説である。王女は美女であったがために妬まれて南海の海に身を投じた。あるいは異臭を放つ醜女^{しこめ}であったため、その身を嘆いて身を投じて美女に生まれ変わったという異説もある。

プラブハン・ラトゥから西14kmのカランハウ (Karang hawu) はインド洋を臨む景勝の地である。そこの溶岩からなる断崖絶壁から王女が大海に身を投げた所と伝えられる。

スダの王女の民話はジャワに伝えられ「南海の女王」の神話になり、マタラム王室の開祖の伝説

(→250)とあいまってジャワ人と共有するようになった。プラブハン・ラトゥでも4月6日に漁民によってロロ・キドゥルに捧げる儀式が行われる。

プラブハン・ラトゥの先のゲンテン (Genteng) 岬にいたるまでのインド洋に面した浜はサーファーが集まる。

⇒949.ロロ・キドゥル女神

112. プンチャック峠

ジャカルタの背後 100km にグデ (Gede 958m) 山という活火山とパンランゴ山 (Pangrango 3019m) が聳^{そび}えている。西に連なるハリムン (Halimun 1929m) 山はそれほど高くはないが複雑な山容が人の接近を拒んだため熱帯雨林が自然態で残された。現在はグデ・パンランゴ山国立公園⁷に包含されて自然環境が保護されており、エコ・ツアーとして入山できる。

ジャカルタからバンドゥンへのルートの一つはグデ山の山裾を通りぬける「プンチャック (Puncak) 峠」である。プンチャックは「山頂」の意味である。火山の裾野を大きなヘアーピンカーブを上り詰めると標高 1200mの峠に着く。気温も低く峠を越す風がさわやかである。峠のレストランでは窓は開けたままであり、クーラーは不要である。

峠から見下ろす緩やかな斜面には別荘が点々と散在している。プンチャック峠は高原リゾート地として知られる。絵葉書で見るスイスの風景を^{ほうふつ}とさせる。乱開発からどのようにして守られているのだろうか。

ジャカルタのカンプン(→728)とは月とスッポンの差の世界である。インドネシアで誰がこのような別荘を持てるのかと気になるが、インドネシアの平均国民所得は低くてもそのバラツキが大きい。例えばポンドック・インダー(→799)の豪邸には芦屋や田園調布の屋敷がちらちらに見えるくらいがあるらしい。インドネシアの資産家は日本の資産家より資産を持っているといわれる。国営企業の管理職クラスの“実収入”は日本企業のサラリーマン重役の及ぶところでないらしいから別荘は珍しくもない。

プンチャック峠はジャカルタからは車で1時間半程度の距離で近い。別荘の利用者はジャカルタから週末に別荘に来て日曜日の夕方にジャカルタへ戻る。いうまでもなく特権階級に属する人々である。このため日曜日の夕方のプンチャック峠からジャカルタへの道は下りだけの一方通行になる。ちなみに道幅は十分に対面交通が可能であるにもかかわらずである。

特権階級のための保養地であったプンチャックにも変化が生じている。サファリ・パークが開園し、ジャカルタから都市中間層(→734)の家族連れが押し掛け、放し飼いの動物や遊園地は賑わっている。そのうちプンチャックも軽井沢のようになるのであろうか。

高原のプンチャックは雨や霧が多く茶の産地(→559)でもある。ここの茶は年中、茶摘みが行われている。品質の点からも10年くらいで植え変えるそうだ。茶はプランテーション(→505)作物としてオランダ時代から植えられジャワ島の特産品となった。

⁷ オランダ植民地時代の1924年、多種多様な生物が生息していることや、人口の集中する低地への水源の確保を理由に保護森林地域に指定。1992年、国立公園に指定された。1994年、日、米、インドネシア政府間で、生物多様性保全に関する技術的な協力計画が取り決められ、同公園で翌年から生物多様性保全プロジェクトが始動した。

これらの西欧資本のプランテーションは独立後イリアン問題、マレーシア問題で西欧との関係が悪化した際に国有化(→475)され、現在は農業省管轄の株式会社である。全量リプトンが輸出向けに買上げていると聞いた。日本のスーパーで買うリプトン紅茶の原産地は明記していないが、ブンチャック産も混入しているのだろう。

高原に聞き入るジャワの茶摘歌 北端辰昭「珊瑚礁」

113. ボゴール宮殿

ジャカルタの南方 64km、高速道路で 30 分余りの郊外の標高 290m とやや上がった「ボゴール (Bogor) 市」がある。町は 1745 年に VOC(→272)のイムホフ (G.W. Bvan Imhoff) 総督により建設されボイテンゾルグ (Buitenzorg オランダ語で「憂いなき都」) の命名は熱帯の地に理想郷を目指したものであろう。独立後、古来のボゴール(「敷物」の意味)に改名された。

1856 年に総督の別荘として建築された白亜の建物はボゴール宮殿として現存している。植民地時代の蘭印総督はボゴールの別荘でパーティを開き週末を過ごした。官邸として常時居住した総督もいた。

庭には蓮の咲いている池があり、日本産という白い斑点のある鹿がいる。鹿の子宮は精力剤になるらしい。放し飼い精力剤の愛用者はスカルノ大統領である。

この別荘を大統領別邸として引き継いだスカルノ大統領当時は第二夫人(→442)ハルティニ夫人が居住していた。第三夫人である日本人デウィ夫人(→363)が経済利権に熱心であったのに向こうをはって第二夫人は共産党に肩入れをした。

9 月 30 日事件(→384)で失脚したスカルノ大統領はこの宮殿に幽閉され、後にジャカルタのヤッソ会館に移され、1970 年に失意のうちに亡くなった。

白亜の建物も熱帯の池の水面にドンヨリと写っている。晩年不遇の大統領の^{おんねん}怨念の思いからスカルノの幽霊が出るとの噂がある。このためスハルト大統領はこの宮殿を利用はするが、決して宿泊をしたことはないらしい。

宮殿にはスカルノ大統領が世界中から収集したヌード画の絵画彫刻コレクションはすばらしいということであるが、残念ながら公開⁸されていない。

この宮殿は 1994 年に APEC 首脳会議が開催された所である。例年恒例のセレモニーであるので世界的会議ではないが、アメリカのクリントン大統領、以下がバティック姿(→782)で整列した。日本の出席者は村山富市首相である。

スハルト大統領の前任のスカルノ大統領は 1955 年にバンドゥン会議(→458)で新興国のインドのネル首相、中国の周恩来首相、エジプトのナセル大統領など^{そうそう}錚々たる顔ぶれを揃えた。スカルノの因縁の深いボゴール宮殿での APEC 首脳会議はスカルノの向こうをはったスハルトの自己顕示であろう。

スハルト大統領がジャカルタ郊外に休息の場を求めたので、当時の西部ジャワ州知事は 750ha の

⁸ スカルノ大統領の絵画コレクションの一部が HP で公開されている。

土地⁹を差出した。元はオランダ人の農園であったから国有地だったそうであるが、数百世帯の農民はブルドーザーで追われた。タポス (Tapos) 牧場と名づけられ牛 800 頭、羊 1700 頭が飼われていた。

宮殿のような邸宅、ゴルフ場、ヘリポートもあったらしい。大統領は「自分は農民の出であるからいつかは農民に戻りたい」というのが牧場を持ちたい理由であった。失脚後は元の農民が耕作のため不法侵入している。

1 1 4. ボゴール植物園

ボゴール宮殿に隣接して「ボゴール (Bogor) 植物園」がある。広さ 110 ㌖¹⁰の地に 15,000 種の熱帯植物が栽培されている。脊梁山脈を後ろにしサラク (Salak) 山の山麓に位置するボゴールは降雨量が多く、「kotahujan=雨の町」といわれる。年間の降雨量は 4000mm 以上で一年に 322 回のスコールが記録されている。

ジャカルタと比べるとボゴールの緑の多さが目立つ。インドネシア大学の農学部が独立したボゴール農業大学や農業研究センターがあり、農業都市ともいわれるようになった基は植物園である。

そもそこの植物園は英国の占領時代にラッフルズ副総督(→338)によって着手され、オランダ植民地政庁によって引き継がれて 1817 年に開園した。現在では一般に開放されており、平日は園内を車で回遊できる。観光客目当ての土産物売りがたむろしており日本語でも呼びかけられる。

もとよりこの植物園は後世の観光客のために作られたものではない、強制裁培制度(→282)に適した熱帯農業作物を見つけるための植民地行政の一環である。茶、煙草、キャッサバ、キナなど新しい植物が試験栽培された。パーム油のとれる油やし(→562)はマダガスカル島からこの植物園に持ち込まれ、ここから東南アジア各地に広がった。今ではマレーシアとインドネシアがパーム油の主要産地である。南米原産のパラゴム(→561)の木もある。

400 種のヤシの木、巨木、竹林など一日で見るには多すぎる。幾多の珍しい植物があるが、ブンガバンケイ(→053)や鬼蓮^{おにはす}が人気スポットである。日曜日には入園料が安くなるので広い芝生の広場と花壇は家族連れで賑わう。

植物園の一角にラッフルズの最初の妻オリビア夫人の慰霊記念碑¹⁰がある。英国のジャワ島占領中の副総督ラッフルズの妻はジャワで死亡した。ジャワ島がオランダに返還された際、これらの慰霊記念碑の保存が条件であった。

ラッフルズはシンガポールの創設者としての榮譽を受けている。しかしラッフルズの東南アジアへのこだわりはジャワ島が本命であった。ジャワ島退去を余儀なくされ、その代替地となったのがシンガポールである。そのジャワ島にラッフルズの名を留める足跡はボゴール植物園にある先妻の慰霊記念碑だけである。

パジャジャラン王国(→260)の所在地パクアン (Pakuan) の王宮は植物園の地にあったらしいが、植物園になる以前の遺跡はイスラム教徒と白人の墓地だけである。

⁹ 750ha の広さを日本の面積で換算すると千里の万博公園の約 3 倍、東京の皇居の約 7 倍になる

¹⁰ 慰霊碑の英文は「Oh thou Whom near my Constant heart one moment hath forget
Then Fate severe hath bid us part Yet stile forget me not

ブンチャック峠の先にチボダス (Cibodas) 植物園¹¹がある。グデ山の登山口になる所で標高 1300m であるため涼しくて広い。帰りの車の混雑さえなければボゴール植物園より良い所というのが駐在員の通の意見である。

太平洋戦争時の日本占領中、ボゴールにはペタ(→309)の訓練所があり、現在は陸軍の訓練所になっている。そこには日本刀を持った日本陸軍の将校服の銅像があり【Daidancho(大団長)Soedirman(→328)】と刻まれている。

115. 新バンテン州

ジャワ島の最西端の「バンテン (Banten) 州」は 2000 年に西部ジャワ州から分離独立した新しい州である。セラン (Serang) 市が新バンテン州の中心である。

そもそもバンテンとはジャカルタの西方 90km の海沿いにあったバンテン王国の所在地である。バンテンは植民地時代バンタム (Bantam) ともいわれた。英語でバンタムとはチャボという闘争心が激しい小型の鶏である。かつてバンタムでチャボの闘鶏をみた西欧人がチャボをバンタムという名でヨーロッパに紹介した。ボクシングのバンタム級の語源はチャボという鶏にちなむ。

バンテンはスダ人の地域であるが、ジャワ海沿岸であるためジャワ人やスマトラ島などの移住者が多く、いわば混合スダの地である。バンテン王国の栄光もプリアンガンのスダ人にはパジャジャラン王国(→260)がつぶされたという屈折感があるのではないか。

要するにバンテンはプリアンガンのピュアなスダ人とは肌合いが異なるらしい。これがバンテン州分離の背景であろう。ちなみにジャカルタではバンテンの名は黒魔術師(→868)の産地として知られる。バンテン出身というだけで若干気味悪がられるらしい。

今日ではバンテンはジャワ島とスマトラ島をつなぐ位置からジャワ海沿岸には鉄鋼、石油化学などの大工場が立地する。海の観光地もある。

バンテン港にある白い塔と五重の赤瓦屋根のモスクが、寒漁村に不釣り合いな立派であるのはこの地がバンテン・ラマ (旧バンテンの意味) といわれるように、16～17世紀にバンテン王国が所在した所だからである。バンテン初代国王の墓があり、ジャワ島のイスラム化のシンボルとして崇拝されている。

最近、王国当時のスロソワン (Sulosowan) 王宮の遺跡の発掘が日本の学者の協力ですすすめられている。遺跡からは日本の伊万里を含むおびただしい陶磁器が発掘されている。中国や日本の焼き物が多いことは裕福な財政の証である。

バンテン王国時代は香料貿易の中継地としてヨーロッパ人、インド人、アラビア人、中国人が蝟集した。人口 15 万人もいたという殷賑のバンテン港は、今では泥に埋まりマングローブが生い茂る寂しい漁村である。

バンテンの名の再登場は 1888 年の農民によるオランダ支配に対するバンテンの反乱¹²である。反

¹¹ チボダス植物園では日本の桜の移植に成功している。

¹² バンテンの反乱の原因を 1883 年のクラカタウ島火山の大爆発がもたらした社会的混乱にオランダ支配に対する山の神の怒りととらえ、イスラム教の狂信思想が結合したものという考察がある。強制裁培制度の実態を告発した「マックス・ハーフェラー

乱は百姓一揆の程度を越えるものではなかった。しかし、これらの反乱がやがて 20 世紀の民族主義運動に引き継がれることになる。

そのバンテンの名が再々登場したのは太平洋戦争における日本のジャワ島への上陸(→300)である。1947 年 3 月 1 日未明、日本軍は 3 方面に分かれてジャワ島敵前上陸作戦をすすめた。主力の西ジャワでは 15 隻の艦船と 56 隻の輸送船がバンテン湾に向かった。総司令官の今村均将軍(→352)の乗る船は爆沈され、総司令官は泳いで上陸した。

⇒261.バンテン王国

116. ウジュン・クロン半島

「ウジュン・クロン (Ujung Kulon¹³)」はクロン岬という意味の通り、ジャワ島西南端からスンダ海峡(→037)へ突き出た半島である。本土との接続地点は沼沢であり、陸からのアプローチは困難でラブハン (Labuhan) から船でしか行けないので実質は島である。

低地熱帯雨林の半島全域 (420k m²) が国立公園に指定されている。公園ではかつてジャワ島の原野を走り回っていた野生動物が保護されている。ジャワ虎(→067)は既にこの公園でも絶滅しており、ジャワ犀(→069)も数えるばかりになった。

しかしバンテン牛(→062)などその他の獣類、鳥類、爬虫類は健在である。海岸には珊瑚や海生生物を楽しめる水族館がある。

動物の聖域として自然保護地域であるので上陸には許可が必要である。宿泊設備もあり、自然観察のエコ・ツアーとして欧米人に人気があるが、一般に日本人や韓国・台湾・香港からの東洋人観光客にはこういう所は人気がない。

スンダ海峡にあるクラカタウ島の爆発の際にウジュン・クロンは津波と降灰に襲われた。今も残る高い崖にある珊瑚礁の残骸はその時の津波の恐ろしさを物語る記念碑である。一時、ウジュン・クロンの生物は絶滅したかに見えたが、時の経過とともに降灰の栄養分と熱帯の気候はこの地を再び生物の宝庫にした。

自然保護に併せて土地景観を含めてユネスコの世界文化遺産に指定されている。ちなみにインドネシアのユネスコに登録の世界文化遺産はウジュン・クロン公園以外にボロブドゥール遺跡(→127)、プランバナン遺跡(→128)、サンギラン遺跡(→138)、コモド島(→216)、ロレンツ国立公園(→240)である。

太古のクラカタウ火山島は大爆発で沈没し、山裾の一部が島として残り、弧状に外輪部分を形成している。その爆発地の後に生じた火山島も 1883 年の爆発で消滅したが、1927 年に再び新火山が海の底から出てきた。アナック・クラカタウは成長中の火山島である。

海の底から湧き出た新火山島は火山そのものの観測もさることながら生物学的にも貴重な存在である。何故なら生物が皆無の孤島の火山島へどのようにして新しい生物が他の島から移住してくるかという雄大な実験の場である。

海底から現れた島は溶岩で黒々しており、海辺の砂も黒い。その黒の世界に生物が宿りついた。海

ル」の舞台はバンテン地方である。⇒サイモン・ウィンチェスター著 柴田裕之訳「クラカタウの大爆発」

¹³ <編者註>ジャワ語で西の意味。Wetan, lor, kidul はそれぞれ東北南。

岸部の小さな動植物から始まり、風に運ばれた草の種が根付き、昆虫も生息するようになる。生物の生命がガスや水蒸気が噴出する溶岩の山腹を下から上へ休むことなく拮がっている様は感動的である。

島へは海峡を漁船で渡る。スンダ海峡の激しい潮流に^{ほんろう}翻弄されて数時間でたどりつく。人の立ち入りは可能になったが、小さな爆発は年から年中であるので噴火の落石に当たる覚悟の上でないといけないらしい所らしい。

⇒021.火山大爆発

117. 幻のバヤ炭坑

西部ジャワのインド洋側の辺境の谷あいには沿岸漁業とゴム園が生計のバヤ (Bayah) という小さな町がある。そこにはジャワ人が居住する集落がある。周りはスンダ人の地域でありジャワ人の飛び地である。ジャワ人がわざわざ移住してくるほど富裕な土地ではない。この不思議な集落は太平洋戦争当時のロームシャの名残である。

オランダ植民地時代当時の石炭は産業のエネルギーであった。ジャワ島は石炭の消費地であるが、他島から石炭を移入していた。しかし植民地時代にバヤに石炭の所在が確認されオランダによって炭坑の開発が計画されたが、石炭の品位が悪く鉄道敷設の困難性から見送られていた。

ジャワ島を占領した日本軍はバヤ炭坑の開発を決意した。この難事業にあえて日本軍が挑んだ理由はジャワ島は日本軍の補給基地であり、石炭の自給自足が求められた。産炭地のスマトラ島が25軍と軍政管轄¹⁴が異なった。とにかくジャワ軍政監部の直営事業として開坑のため住友石炭鉱業から技術者 150 名が派遣された。後に経営は住友石炭鉱業に委託された。日本軍は蘭印の占領によって接収した事業を日本の民間企業に割り当て、民間企業は軍からの受命により否応なく占領地に赴いた。

バヤ炭坑の問題は鉄道の建設で既設の鉄道からサケティ (Saketi) まで 150km のバヤ鉄道の建設が必要であった。しかしバヤはマラリアの^{しやうけつ}猖獗する人口希薄の地であり、労働力がなかった。このためジャワ東部・中部から 25,000~55,000 のロームシャが動員され、突貫工事で平常時なら 10 年かかる工事をわずか 1 年で完成した。

ロームシャに十分な食料が確保もされなかったため 1 日 400~500 人の逃亡者を出したが、犠牲者は 1 万人といわれている。

炭坑は数箇所に分散しており、人力だけで坑道を掘った。軍の強行策により炭鉱開発は行われたものの本格的生産に入ることもなく終戦となった。

民族的社会主義者のタン・マラカ(→295)は日本占領の間は隠れており、戦争終了後に突如として現れて驚かせた。そのタン・マラカの潜伏先がバヤ炭坑の労務職員であった。自伝によるとバヤ炭坑のロームシャが行き倒れとなってさ迷う有様を目撃している。彼は時機がくるまでは身を伏せていたためロームシャの惨状に目を^{つむ}瞑った。

バヤ炭坑の炭層は 60cm と薄く、石灰石を挟んだ断層の多い炭層で低品位のため平常時の経済にお

¹⁴ ジャワ島は陸軍第16軍、スマトラ島は第25軍が管轄し、上位機関はシンガポールの第17方面軍であった。ちなみにバリ島・カリマンタン島以東の東インドネシアは海軍の管轄であった。

いては採算がとれなかった。戦時においてロームシャと資材を総動員して開坑した炭坑は再開されることもなく廃鉱となり、ロームシャの血と涙のバヤ鉄道もほとんど石炭輸送に使用されることなく廃線となった。

1992年にNHK取材班が訪れた当時は多くの坑口は所在も分からなくなっていたが、1個所の坑口に狸掘りの形跡があったと報告している。1946年に建設されたバヤにあるロームシャ慰霊碑も風化していた。

⇒305.ロームシャ

118. チルボン市

西部ジャワと中部ジャワの州境の「チルボン (Cirebon) 市」はジャワ海に面したパシシル(→136)にある港町である。人口は35万人と大都市の一つである。町の起源はパジャジャラン王国(→260)の外港であったことによる。

海老のとれる豊かな海に面していることから“海老の町”といわれたが、最近では海老の収穫も減っている。代りにジャワ海の石油採掘の基地になっている。

ジャワ・イスラムの開祖ワリ・ソゴ(→712)といわれる9聖人の一人であるスナン・グヌンジャティ (Sunan Gunungjati) がチルボンに1552年イスラム王国を建設し、イスラム教を奉じる最初の王となった。

チルボン王国は隆盛を極めイスラム布教の中心となった。バンテン王国(→261)、ドゥマック王国(→249)と連携しながらVOC(→272)に対抗したが、最終的に内陸から勃興したマタラム王国(→250)の属国になり、英国統治時代にチルボン王国は廃絶になった。しかしその子孫が王室の余命を保ち、今日ではクラトン(王宮)が観光名所になっている。

海岸沿いの北の郊外にあるスナン・グヌンジャティの墓は廟となりジャワのイスラム教徒の巡礼地の一つとなっている。35日毎のお祭は特に賑わう。イスラム聖人の墓であるがヒンドゥー様式が見られ、陶磁器の装飾も異国風である。イスラム教徒のみならず華僑の信仰も受けた。妻が中国人であったからである¹⁵。瓶でこの廟に出る聖水をもって帰れば病人も治るといいうありがたい水である。

チルボンはジャワに隣接するスنداの辺境である。言語はスندا語よりジャワ語の方が有力でスندا訛りのジャワ語らしい。スندا文化にジャワ文化に加えて海からの外国からの文化が混合する港町であり、特殊な歴史とパシシル文化を有している。

特に中国との関係が深く、チルボンの文化には中国の影響が大きい。古い中国寺院があり、インドネシアでは有数の漆器の製造地である。チルボン・バティック(→927)の特徴の“岩と雲”のデザインは中国の影響が明らかである。

伝統芸能ではタリ・トッペン (Tari Topeng) といわれるチルボン独特の仮面劇(→907)を伝えている。ラタン細工やガラス絵などの民芸品などもあり芸術気質の職人の町でもある。

チルボンの背後にチェルマイ (Ceremai 3078m) 山がある。その中腹にリンガジャティという保

¹⁵ <編者註>スナングヌンジャティの祖父であるラデンパタの母親も華人(雲南人)であった。

インドネシア専科

養地がある。独立戦争の最中に新共和国がオランダと独立交渉を行った所であり、リンガジャティ協定(→325)の名で知られる。当時の建物¹⁶が保存されて記念館になっている。チリムスも保養地で温泉がある。

チルボン北方の港町であるインDRAMAYU (Indramayu) は距離的にはチルボンよりジャワから離れているが、チルボンよりジャワ色が強い。日本占領中のインDRAMAYU事件(→307)は占領行政に対する住民の反乱であった。

⇒262.チルボン王国

¹⁶ 華僑の富豪クウェ氏の別荘がオランダとの会談のために提供された。